

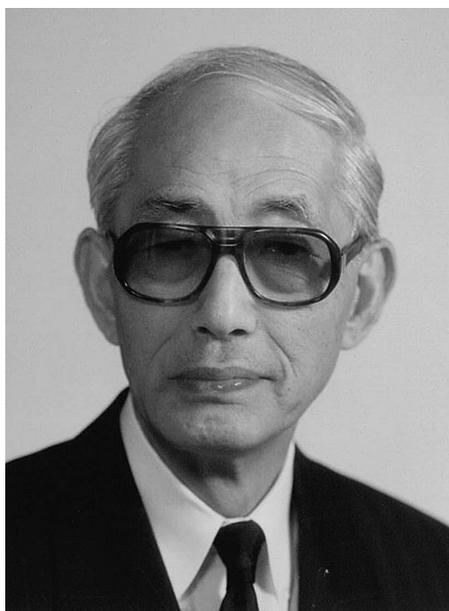
## 追悼 小尾信彌先生

小尾信彌先生と天文学の普及 杉本大一郎 (東京大学名誉教授, 放送大学名誉教授)  
sugimoto@wish.ocn.ne.jp

昨年(2015年)の秋も終わり頃、東大教養学部(通称駒場)のある人から「小尾先生が亡くなっていたのを知っているか」との電話があって驚いた。ご子息に電話で伺ったところ、一昨年(2014年)の9月28日に89歳で逝去された、そして生前の先生から「一年間は公表しないで欲しい」と言われていたと伺った。駒場では毎年秋に、ベテラン会と称して元教員の集まりをもっているが、2015年10月27日の会では、まだ名簿に小尾先生の名前が載せられている。想像するところ、それをきっかけにして公表されることになったようである。

小尾さん(以下ではこのように呼ばせていただく)の体調が良くないことは、それ以前から知っていた。亡くなった年の4月には、放送大学で一緒だった吉岡一男さんとお見舞いに行き、小尾さんと駒場や放送大学時代のことを語り合った。その後、そんなに早く逝去されたことは知らず、またお見舞いに行かねばと吉岡さんに話していたところであった。

ご子息からもう解禁との了承を得たので、朝日新聞科学医療部の高橋真理子さんを通して、「亡くなっていたことがわかりました」という趣旨の死亡広告を出してもらった。小尾さんは、ソ連のスポーツニク1号(人類初の人工衛星)が打ち上げられた1957年よりもさらに1年前に、米国NASAのフォン・ブラウン氏著の火星探検の本を翻訳された。その後、ジョージ・ガモフたちの著書など、宇宙関係の一般向けの書や、日経サイエンスの記事も数多く翻訳された。1972年の教養



小尾信彌先生.

学部報(駒場の学生・教員向け広報紙)に、ご自身で「マージャンもゴルフもやらない僕にとって、夜おそくラジオを聞きながら、本の構成を考えたり、翻訳をするのは、一種のリクリエーションである。…今日まで、二十数冊の本を訳した。」と書いておられる。

小尾さん単著の書だけでも45、訳書や編著を加えると70近くがWikipediaにリストされている。日経サイエンスや、今は休刊になった季刊誌「星の手帖」でも、天文学のわかりやすい解説に尽くされた。あるとき、皆さんに読んでもらうコツを小尾さんに伺ったら、「半分は読者の知っていることを書き、後の半分で新しいことを書く。

すると、読者も自信をもったり喜んだりして、新しいことを読み取ってくれる」とのことだった。論文書きとは違うのである。

今日では研究の成果は社会に説明し還元すべきもので、研究所にはその役割を担うスタッフも置かれている。しかし天文学でいうと、1969年のアポロ11号での人類初の月面着陸や、1970年代の（多波長観測による）発見の時代までは、天文学は一般の人々の関心をそれほどひかなかった。小尾さんはその当時から著書だけでなく、NHKのテレビ番組を通して天文学を広められた。今では多くの人々の興味が天文や宇宙に広がっているが、その礎を作られたのだと言ってもよい。

小尾さんの宇宙の話に人気があったことがわかるエピソードを二つ紹介しておきたい。東大を定年退官された1985年春、最終講義の際に研究室にあった多数の著書を「ご自由にお持ちください」と並べた。すぐになくなったのは良かったが、それに小尾さんのサインが欲しいと、学生の長い列ができてしまった。つづいて準備していたパーティーがなかなか始められなくて、弱ったのだった。その後、それとは別に本格的な還暦と定年のパーティーがホテルで催されたが、そこには多数の放送・出版関係の方々が参加され、司会もNHKの現役アナウンサーによるものであった。

小尾さんの普及活動は、その後も放送大学やNHKを通して続けられた。その頃、天体画像が直径30 cmのレーザーディスクで見られるようになると、早速、私物としても購入され、いろいろなところで使われた。初めて見るデジタル画像の美しさに感動したものである。

話は戻るが、そのように一般の人々にも人気があるので、朝日新聞の高橋真理子さんに伝えた際、そのうちに「惜別」欄にでも、と持ち掛けた。しかし1年以上も経っているからとかいうことで、「新」聞にはではなく、そのWeb-RONZAに投稿してくださった。題して、『『日本版カール・セーガン』小尾信弥氏逝く、多数の著書・訳書を

通じ、天文学を茶の間に届けた先駆け」。初めの1/3はネットで誰でも見ることができるが、全文を見るためには、残念ながら登録してログインしなければならない。そこで知ったことだが、小尾さんは、「葬送の自由をすすめる会」の顧問でもあった。そんなことまでなされたのか、と驚きである。高橋さんから「散骨でもされたのですか」と尋ねられたが、実際には、東京都文京区の墓地で眠っておられる。心はずでに大好きな宇宙へと旅立たれたのだろうか。

研究や大学のことも思い留めておきたい。私が小尾さんの名前を知ったのは、武谷三男、畑中武夫、小尾信彌の論文“Populations and Evolution of Stars (Progress of Theoretical Physics, 1956)”を通してである。基礎物理学研究所が発足して2年目の1955年に、所長の湯川秀樹先生の意向を受けて早川幸男先生が中心になって組織された短期研究会「天体の核現象」の成果の一つである。短期と言っても2週間の長きにわたり、物理学と天文学の指導的研究者が20名ほど集まって交流し、新しい分野に取り組み始めたのである。

今でこそ物理学と天文学は一体となって研究するものだと思われるが、その最初の試みだったと言ってよい。若かった小尾さんは、量子力学の角運動量でのラカー係数の計算などをしておられ、堀江久、有馬朗人両先生など、原子核の殻模型の研究者と交流があった。当時は原子核構造論も研究の初期段階にあり、天文学者の中でも関係する人は僅かしかなかった。武谷・畑中・小尾の論文は星の進化を論ずることから始まり、銀河の中の星の種族の形成から銀河の進化史までを論じるものであった。後に、そのストーリーは天文学の常識になったが、当時は3人の著者の頭文字をとって、THO「とても・ほとんど・思えない」理論と揶揄されるほど、先進的なものであった。

当時、外国の学術誌は手に入りにくかったので、物理学会は重要な論文を集め、そのリプリント版を作っていた。その中の「新編物理学選集

20」は、畑中・小尾先生によって編集された。1942年（戦時中）から1956年までの顕著な論文が集められていて、私の大学院生時代（1959-64）に重宝したものである。

このように新しい学問を学会に紹介することにも努力されたが、教育・研究の組織づくりにも尽くされた。1952年から非常勤として、翌年からは常勤として東大駒場で天文学の講義をされ、それを聴講して天文学の道に進んだ人もある。当時の一般教養では、天文学は地学に分類されていた。そこで鉱物・鉱床学の先生が定年になられる機に、地学教室を宇宙地球科学教室に改称し、地学と天文学を定員で半々のものに変えられた。この名称は小尾さんの発案で、その後いろいろところで使われるようになった。

その機会に、NASAから帰国したばかりの私を駒場へ呼んでくださった。名古屋大学へ交渉に来られたとき、私は直接には会っていないが、早川幸男先生から「早川研で理論を続けるか、それとも東京へ行くか」と尋ねられ、私はその場で決断したと覚えている。京都大学の大学院を出たとき、林忠四郎先生に、名古屋へ行くといったときと同じ発想である。世話になった先生の下に居るのは窮屈だし、居場所を変えると新しいことが見えていいだろうと思ったのである。

当時、物理分野では、人事交流はいいことだとされていたが、ほかではあまり実行されていなかった。京都から東京へ移った人への赴任旅費の手続きが失念されたり、ある学部では初めて東大出身以外の人が教授に着任したとって新聞種になったりしたくらいである。そういうわけで、小尾さんは、雇われた人の名前ではなく、出身別で画期的な人事をされたわけである。

駒場へ初めて様子を見に行ったとき、NHKのTVに出演することを持ち掛けられた。私は面白がってそうさせていただいた。やや後の、白鳥座にCyg X-1というブラックホールが発見された頃には、化学出身で福音書館からこども向けの科学

の絵本を精力的に出しておられる方と、NHKでブラックホールのことなど対談もした。その後も小尾さんには、ずいぶんいろいろな方面の方々に紹介していただいた。駒場では理系・文系のいろいろな分野の先生方との交流がある。それも含めて、私は東大を定年退職するまで、文化的にいろいろと楽しませていただいた。

駒場では、小尾さんのオフィス（研究室）の隣の部屋ですっと過ごすことになったが、研究も駒場での学内行政も「好きにやれ」ということだった。小尾さんは1979年に始まる大学共通一次学力試験の設計に、また1983年度に開設される放送大学の準備に忙しかった。1979年度には「宇宙の進化」という科目を設定して、テレビの試験放送を始めておられる。83年度からは、海洋研究所の奈須紀幸先生と共同で「地球と宇宙」、その後は「宇宙の構造と進化」と続けられた。そこでは、より若い天文・物理学者も含めて講義を編成された。敬称略で、小尾信彌、佐藤文隆、小平桂一、江里口良治、池内了、海部宣男、杉本大一郎、野本憲一、小田稔、中沢清、大島泰郎（宇宙生物学）の諸氏である。

その後1992から1997年度の終わりまで6年間、学長を務められ、放送大学の全国化、すなわち、国内のどこでも放送を聴取できるようにする、学習センターを全国に配置する、一般の大学との単位互換を締結することなどに努力された。放送大学のような組織は、世界では「公開大学（Open University）」と呼ばれている。国際的な公開大学連合でも活躍された。テレビを中心とする公開大学は日本以外にはなく、それなりの役割を果たしたのである。

考えてみれば、小尾先生はずいぶんいろいろな場面で活躍された。放送大学では学長職ということで、定年よりも3年間長く勤められた。退職後は理事会などに元学長として出かけておられたが、お疲れになったのかもしれない。大好きだった美しい星の世界で、ゆっくりお休みください。

## 小尾信彌さんの思い出

古在由秀 (元 東京天文台)

小尾信彌さんの健康状態がよくないとは伺っていたが、2014年年9月28日に亡くなったことを、翌年の11月になって知らされた。

小尾さんは1925年3月17日東京で生まれ、多くの英才が集まる本郷区立誠之小学校で学ばれ、次いで、尋常科4年、高等科3年の一貫教育の成城高等学校に進まれた。当時は戦争末期で、就学期間が半年短縮され、1943年10月に東京帝国大学理学部天文学科に入学され、1946年9月に卒業された。

その後東京大学理学部助手を経て、1950年5月に東京天文台に転勤され、畑中武夫さんが部長の分光部に席をおき、1953年4月に東大教養学部の助教授となられた。この間、物理学者と共著で、電子の角運動量の計算に必要な Racah 係数の表を作られ、THOと知られる論もこの頃発表されている。

小尾さんは、1958年から、アメリカ Boston の

北 Bedford にある科学研究所で研究をされるようになった。筆者は少し遅れて、Cambridge 市にあるスミソニアン天文台で働くことになったが、懐中30ドル（日本での月給の半額）で Boston に着いた。そこでホテル代を払い、給料は後払い、下宿代も前払いという状態なので、小尾さんに借金をして生活を始めることとなった。その後、中古の車を買うにも小尾さんに世話になるなどした。

その後、1978年から15年間、季刊誌『星の手帖』の編集委員として、阿部編集長、村山定男さん、小尾さん、藤井旭さんと一緒に、3カ月ごとに編集委員会に出て、仲間内では「小尾談」として知られていた、小尾さんから面白い話をたくさん聞くことができた。

小尾さんに最後にお会いできたのは、2012年の秋、少人数での畑中さんの50回忌の会をしたときで、小尾さんは畑中さんの思い出を語られた。

## 小尾先生と私

吉岡一男 (放送大学教授)  
yoshioka@ouj.ac.jp

小尾先生にはお世話になったどころか、小尾先生が居られなかったら、私は別の人生を歩んでいたものと思われる。したがって、小尾先生の思い出を語ることは、私の半生を語ることになる。

世の天文少年と同様、私も野尻抱影氏や山本一清氏の本とともに小尾先生の本を読んで、宇宙に興味をもった。東大に入学して、教養学部で憧れの小尾先生の講義を受けたときは、ほかの先生方の講義よりも高揚感と緊張感を覚えた。最初の講義は天体力学の話から始まったと記憶している。

私が進学した基礎科学科では卒業実験と称して、先生方が提案された実験の中で希望のものを

選択することになっていた。しかし、その中に天文関係の実験がなかったので、私は事務の方に、天文関係のものをやりたい、と希望を述べた。親切な事務の方の尽力により、小尾先生のもので卒業実験の代わりを行うことになった。小尾先生のもとは、宇宙の初期状態を論じた論文を与えられ、それを読むことで卒業実験になった。慣れていない概念を慣れていない英文で読むのには苦勞した。しかし、そのお陰で卒業することができた。

卒業後は東大の天文学科の修士課程に進学した。大学院では山下泰正先生のご指導のもとで恒星の分光の研究で、修士と博士の学位を得た。し

かし、すぐには職が見つからず、財団法人・私学教育研究所の専任研究員として就職した。ここは、私立の中学・高校の理科センターの役割を果たしており、研究員は教員免許状をもつべきものであったが、私はもっていなかった。

そのことがわかり、ほかの職を探さなければならなくなった。結局、北海道教育大学旭川分校の理科教育の助手の公募で採用されて、旭川に行くことが決まったときに、小尾先生から連絡があり、3年後に助教授として来てくれないか、とのことであった。ありがたいお話だったので、行くことに決めた。1982年のことであった。結局、その4年後に放送大学に赴任したが、旭川に居る間に小尾先生は公開講演会に来ていらして、手配をした人の案内での層雲峡見学にご一緒したり、私の家で夕食をご一緒していただいたのも懐かしい思い出である。

放送大学では、理学部に相当する自然の理解専攻（現在は、自然と環境コース）の中の宇宙・地球科学分野に所属した。教授は小尾先生と、海洋研究所の所長をされていた奈須紀幸先生であった。両先生とも大らかな方だったので、自由に学生の指導などの教務関係をさせていただいた。ただ、放送授業の最初のTV収録時に、小尾先生が立ち会われたが、収録後に「吉岡君、学生は印刷教材も読むのだから、放送授業でそんなに詰め込まなくてもいいんだよ。」とアドバイスされた。

放送大学では、学生さんはTVカラジオの放送授業と面接授業と称するスクーリングを受ける。両先生はどちらの授業でも小尾・奈須コンビとして好評だった。ただ、単位認定試験と称する放送授業の期末試験では、私の奈須に鬼の小尾、と学生さんの間では言われていた。地球科学分野の試

験が易しいのに、宇宙科学分野の試験が難しかったからである。宇宙科学分野の試験問題を実際に出題した私は申し訳なく思っている。

小尾先生は1989年に放送大学の副学長になられ、1992年には学長になられた。学長は2期務められたが、それ以前と変わらず接していただいた。

たとえば、放送大学の教職員の新年会等で私は以前と同様、小尾先生に挨拶せずに途中退席したことも多かったが、上下関係の厳しい同僚の文系の教員からは驚かれた。もちろん小尾先生はそのようなことに頓着されなかった。小尾先生と接触することの多かった同僚の先生方から伺ったところでは、付属施設の立ち上げなどの実質的な活動を伴う委員会では、委員に自由に行動させて、期限内にきちっと仕上げる手腕も持ちこのことであった。

また、Asian Association of Open Universitiesと呼ばれるアジアの公開大学の組織の会長を1995年から務められた。アジア各国持ち回りで開かれた年次大会に参加され、ご自分のスピーチとともに各種分科会にも精力的に参加されるなど、その活力には驚かされた。

小尾先生は細かいことで注文はつけないので、学長時代、事務方の受けも良いようであった。そのためか、定年になられた後も、教職員の一部がしばらくの期間、毎年非公式に「小尾先生を囲む会」を開き、小尾先生を囲んで夕食を食べながら懇談した。もちろん私も参加した。このようなことは、ほかの学長にはなかったことである。

小尾先生のお蔭で放送大学ではいろいろな年齢の向学心の高い学生さんと接することができた。とても感謝している。小尾先生、ありがとうございました。安らかにお眠りください。

## 小尾先生の思い出

山岡均 (九州大学大学院理学研究院／国際宇宙天気科学・教育センター)

「先生のお名前、実家の本棚にあったよ。」

小尾信彌先生のご自宅を訪問した帰路、天文とは無縁だった妻となる人がつぶやいた。1995年春、私たちは結婚式を控え、小尾先生夫妻に媒酌をお願いして、ご快諾をいただいたところだった。

田舎育ちの私たちにとって、小尾先生は、数々の著作を通して天文学を易しく教えてくださる方であった。私は直接授業を受けることを夢見て1984年に東京大学に入学したが、小尾先生は退官直前で、1年生のときに最終講義を聴講できたのはせめてもの幸이었다。先生は雑誌「星の手帖」で、1978年創刊から1993年の終刊までずっと編集委員を務められたが、大学・大学院生時代の私はその編集部には居候するようになり、折に触れて先生と接するチャンスに恵まれた。そのご縁で私たちの結婚式の媒酌をいただけて、たいへん光栄なことだと思っている。

「今度出す僕の本、手伝ってくれない？」

披露宴のひな壇で、緊張している私に小尾先生がささやくようにおっしゃった。これまで書きためた稿に、最新の宇宙論や近年の天文学の進展を書き加えてほしいというお話だった。たいへんうれしいご提案に頭は本の内容でいっぱいになり、最後の新郎挨拶で何をしゃべったか記憶にない。こうしてできあがったのが「宇宙のしくみがわかる本」(1996, 大和書房)で、私の遅筆のせいで結婚式の翌年になってしまったのが申し訳なかった。

そののち、小尾先生にお会いするのはパーティの席が多かった。1998年には小惑星(6669)にObiと命名されたことの祝賀会が、全国から多数の出席者を迎えて盛大に執り行われたが、私たち



写真1 媒酌を務める小尾先生(左)。右端の洋装の女性は小尾夫人の龍子さん。



写真2 パーティで筆者の妻・長女と。

も福岡から生後5カ月の長女を連れて出席させていただいた。小尾先生が割れもののようにやさしく抱きかかえてくださった長女が、今年に大学受験なのだから、月日が経つのは早いものだ。

季節のあいさつを続けてきたが、2014年夏にはご長男から礼状が届いた。近況を伺ってお見舞いに訪ね、夏の暑さや天文現象についてしばらくお話しすることができた。それから数旬でお亡くなりになっていたことを知ったのは、皆さんと同じく昨年11月だった。